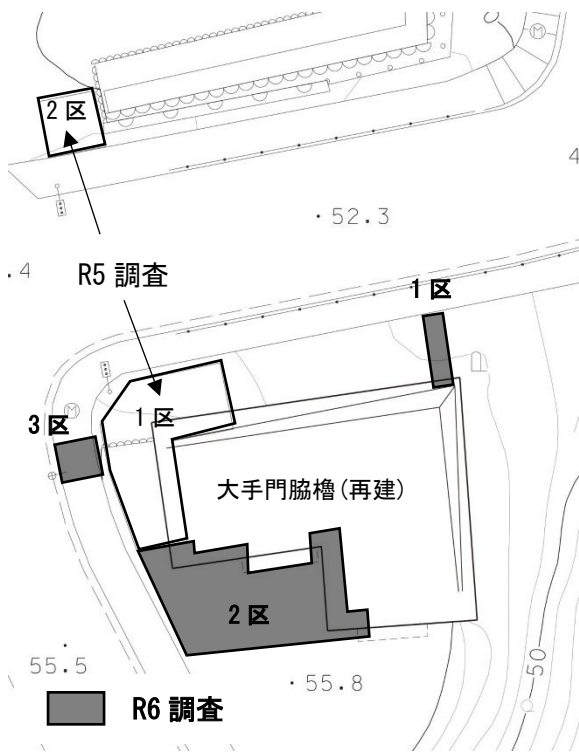


発掘調査速報！ 仙台城大手門の柱の痕跡を確認

令和6年6月～12月に大手門跡および周辺発掘調査(第2次)を実施しました。調査地点は大手門脇櫓(再建)の周辺で行っており、焼失前の大手門・大手門脇櫓周辺の状況を確認することを目的としています。Vol.22では今回調査を行った3地点(1～3区)について、それぞれ主な成果をご紹介します。



第1図 調査地点の位置

仙台城の大手門の創建年代については、本丸造営時に建造したとする慶長期造営説、二の丸を造営した頃に、その大手門として建造されたとする寛永期造営説など諸説ありますが、江戸時代を通じて正門として存続していました。

昭和6(1931)年には、大手門と大手門脇櫓が国宝に指定されましたが、昭和20(1945)年7月の仙台空襲によりどちらも焼失しました。建物構造は木造2階建であり、規模は1階が約19.7m×約6.8m、高さ約12.5mあり、全国的に見ても大規模な門です。



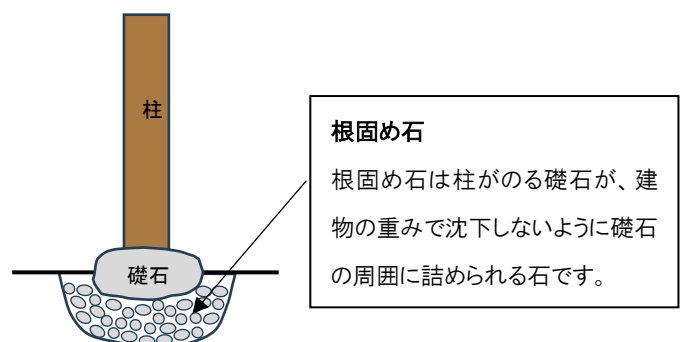
第2図
大手門東面(正面)
全景
(『仙台城』(仙台市教育委員会1967より))

大手門の柱の痕跡(礎石跡)を確認(3区)

脇櫓(再建)西側の3区では礎石跡が1箇所検出されました。この地点は、昨年大手門の柱の痕跡(礎石跡)が3箇所連なって見つかった部分の延長線上にあたります。礎石本体は残されておらず、円礫で構成される根固め石が確認されました。本来の地表面は戦後に削り取られていると考えられます。北側は埋設管によって削られ、西側については別の埋設物設置によって削られていることが確認されました。



第3図 礎石跡の検出状況



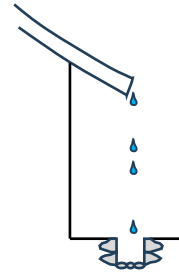
第4図 礎石跡の模式図

大手門脇櫓の周囲を巡る側溝を検出(2区)



第5図 令和5年度の空撮写真

大手門脇櫓(再建)の周囲では、石組側溝が検出されました。昨年検出した範囲と合わせてみると、クランク状に屈曲する様子が見られます。古写真や過去の図面でも、大手門と大手門脇櫓の周囲には側溝が巡っていることが確認されています。令和5年度の調査で確認した石組側溝に電動工具によるものと推測される痕跡が確認されたことから、今回検出された石組側溝も、明治時代の陸軍第二師団による大手門修復に伴い設置されたものと考えられます。

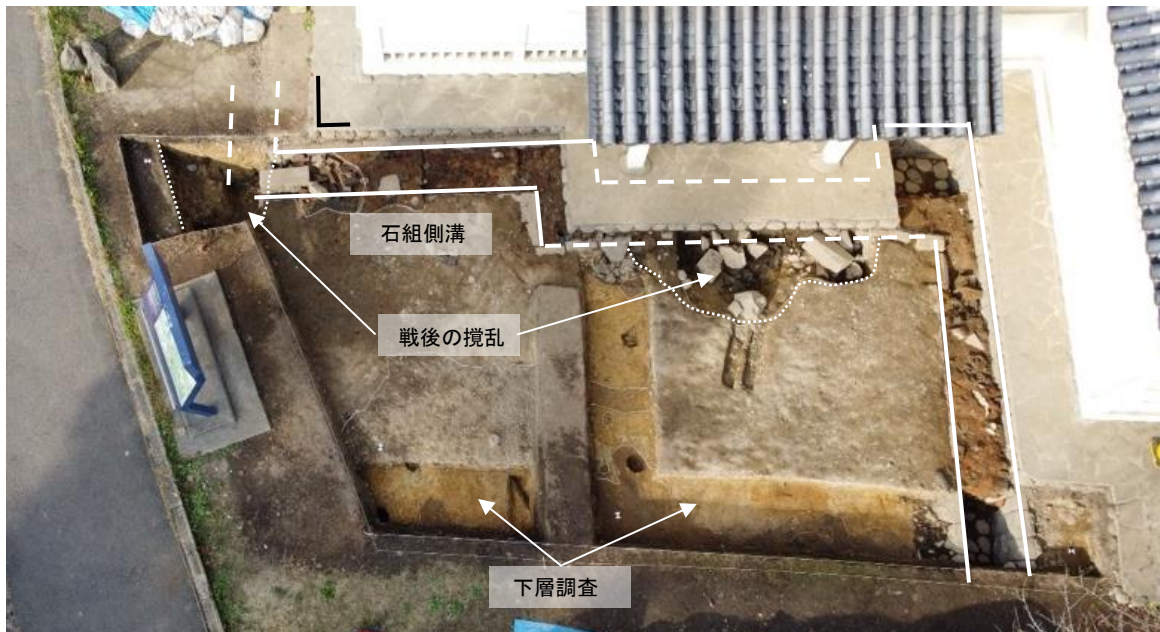


第7図 石組側溝模式図

石組側溝は屋根から落ちる水を受ける雨落ち溝と考えられ、焼失前の脇櫓の屋根に合わせて設置されたものと考えられます。



第8図 石組側溝の底面(南東から)
石材が2段組まれており、底面には円礫が敷き詰められています。



第6図 令和6年度 2区の空撮写真

大手門脇櫓石垣の基底部分を確認(1区)

1区では、大手門焼失後に行われた道路造成の削平と、埋設管設置のための大規模な掘削が確認されました。戦後の掘削が及ばなかった脇櫓の石垣の基部付近で、脇櫓にかかわる盛土や、石垣の基底部分を確認されました。



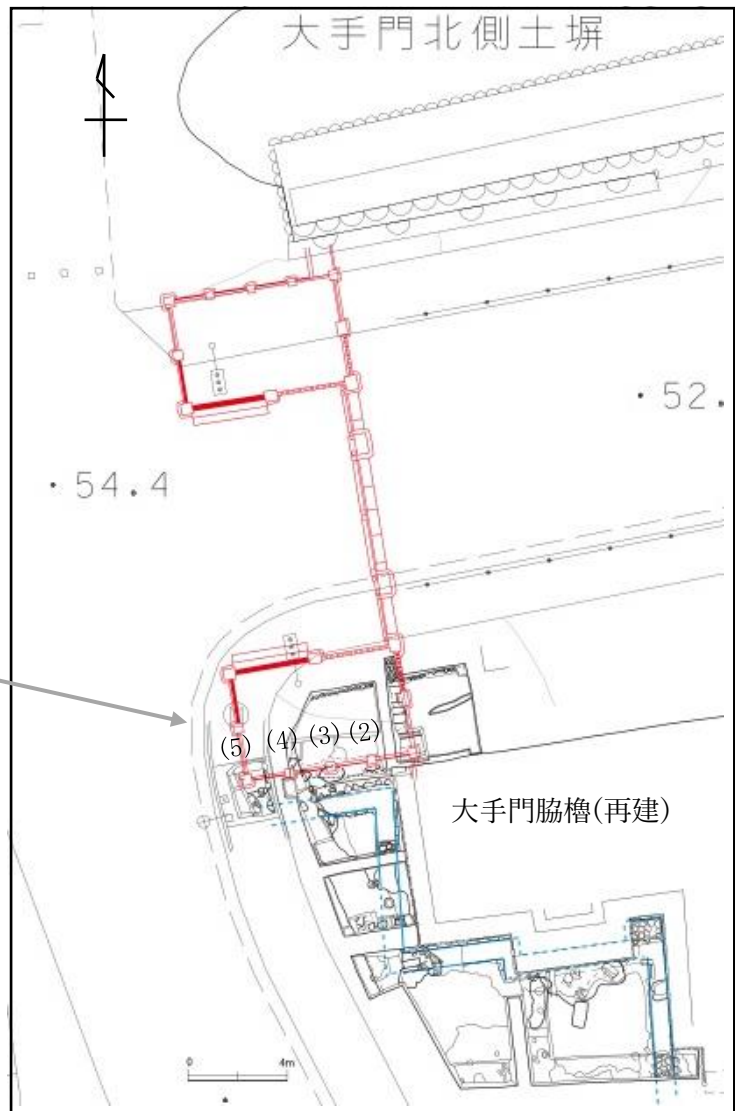
第9図 1区:埋設管設置状況(西から)

令和6年度の調査成果まとめ

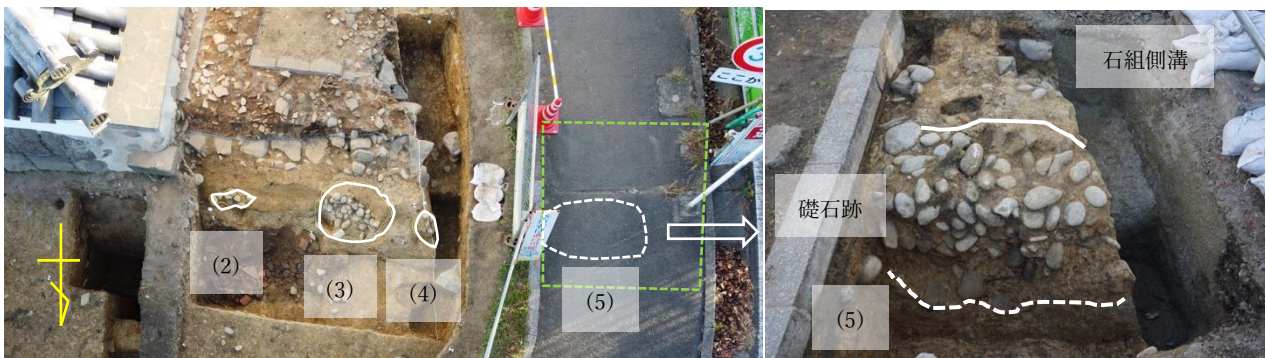
- ・大手門の古写真を見ると、南辺の礎石は5つとなっており、東から2番目の柱が石組側溝の南北辺の延長線上にあることが確認できます。そのことから、調査で確認した4つの礎石跡は、東から2～5番目の礎石跡であると考えられます。
- ・南西隅の柱の位置が確認されたことで、大手門の範囲をさらに絞り込むことができるようになりました。
- ・石組側溝が脇櫓の西から南にかけて確認されたことで、脇櫓の屋根の範囲を推定する材料が得られました。令和5年度の調査成果もあわせて考えると、再建された現在の脇櫓は、焼失前と比べて西側の位置がずれて建てられたことが確認されました。



第10図 大手門南面全景
『仙台城』（仙台市教育委員会 1967
に番号を加筆）



第11図 大手門跡の位置推定図
(小倉強「仙台城の建築」掲載図面のトレースを合成)



第12図 令和5年度・令和6年度検出の礎石跡と石組側溝（北から）（番号は図16, 18と対応）